日本医史学雑誌　第60巻第4号（2014）　389–397

国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』の書入れについて

天野　陽介

日本大学大学院文学研究科／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

受付：平成26年6月20日／受理：平成26年8月22日

要旨：国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』の書入れについて，「師伝」「師説」を含む書入れなどに注目しこれらを検討した．その結果いくつかの書入れは曲直瀬道三と秦宗巴との師弟問答書簡を録した杏雨書屋所蔵『黄帝明堂灸経不審少々』中の道三による宗巴への返答にみられることが判明した．これにより，この書入れは道三門あるいは宗巴門の経穴研究と少なからぬ関係があることが明らかになった．そしてこの書入れにある「師」は曲直瀬道三を指すと考えられる．

日本の経穴研究は江戸時代以降，多くの経穴書が編まれ活発に行われた．道三，宗巴の両者が，その先駆けとも言える安土桃山時代に行っていた経穴研究の一端が書入れとして保存された国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』は，同時代における経穴研究の実態を残した貴重な資料であるといえる．

キーワード：新刊黄帝明堂灸経，曲直瀬道三，秦宗巴，黄帝明堂灸経不審少々，経穴研究

1. はじめに

中国伝統医学は中国にその源流を発する伝統医学で，薬物湯液治療，針灸治療，養生を三大柱として行われる．薬物湯液治療は，動・植・鉱物薬を単独あるいは複数を用いて治療にあたる．針灸治療のうち，針治療は主に金属製の針を用いて人体に刺入（ときに圧迫・擦過）することにより，また灸治療はヨモギの葉を精製して作る艾を人体上で燃焼することにより，身体に刺激を与えることを治療手段とする．その刺激は，長年にわたる経験の蓄積により高い治療効果が認められた部位（いわゆる腧穴・経穴・ツボ）や，症状のある部位などに与えられる．養生は按摩，運動，飲食，性生活，生活指導などを通じ，健康維持や長寿の実現を図るものである．

中国伝統医学の歴史は長く，その淵源は古代中国にまで遡る．その医学は日本・韓国など周囲へ広がり，各々独自の展開を果たした．わが国では，この中国伝統医学は東洋医学あるいは漢方医学とも呼ばれ，現代においても疾病の治療および予防として活用されている．

ところでまた，「十四経脈（正経十二経脈・任脈・督脈）に所属し名称を持ち部位が定まっているもの[1)]」と現在定義されている経穴は，針灸の施術・診断部位に用いられているが，その運用において経穴部位が基本的要素となることは言を俟たない．しかしながら，医学古典の諸書においては経穴の列記法や経穴部位の表記に相違が見られ，これら諸説の何れに従うかはしばしば論究されてきた[2)]．経穴部位の研究が，具体的にいかようになされてきたかを明らかにすることは，医学史的意義はもとより，現代の経穴研究に資することは大きく，引いては針灸臨床における経穴運用の幅を拡げる上にも大いに意義があると考えられるのである．

我が国における経穴の研究は，17世紀前半を境にその依拠する中国典籍が大きく変遷していった．このことは，安土桃山時代に興った針灸諸流派の流儀書においてもその傾向が見られる．つま

り，永禄（1558～1570）頃に興った吉田流[3]の流儀書では経穴は部位ごとにまとめられ，また経穴名に隠名を使用している．これは自流の学術秘匿のためであったと考えられる．更にまた文禄（1592～1596）慶長（1596～1615）頃に興った入江流[4]の流儀書では経穴名には仏教系医学書『耆婆五蔵経』に基づいた隠名を用い，病症名も仏教系医学書の『五体身分集』によって記載している．これら吉田流，入江流には仏教系医学の影響が見られ，経穴の記載においても同様に仏教系医学の影響が見られる[5]．

一方，同じく文禄慶長頃に興った扁鵲新流（扁鵲真流）[6]の流儀書では経穴の記載は『黄帝明堂灸経』に基づいている．またやはり文禄慶長頃に興った雲海士流[7]，匹地流[8]の流儀書において，経穴の記載は『十四経発揮』に基づいて行われている．これ以降，17世紀半ばに興った妙針流，路針流など諸流派の流儀書は『十四経発揮』に基づくものが多くなっていく．

これら日本の針灸流儀書から見た，経穴研究の主に依拠するテキストは16世紀後半から17世紀前半にかけて，仏教系医学書から『黄帝明堂灸経』，そして『十四経発揮』へと変遷していることが知れる．

これらの事について大浦宏勝は詳細な研究を行い，そのまとめとして次のように述べている[9]．

> 今回取りあげた1560～1640年頃までの取穴資料は『耆婆』取穴に代表される仏教医学的針灸術の実践から，明代針灸医学への変遷過程を示しており，近世針灸医学への脱皮を模索していた一端が理解できよう．
>
> こうした明代針灸医学の本格的導入の流れと軌を一にして，諸流派ともに『耆婆』取穴の影響を脱し，『十四経発揮』あるいは『明堂灸経』の経絡経穴に基づく取穴へと衣替えをしてゆく．

このような経穴研究の依拠する中国典籍の変遷には，慶長元年（1596）に『十四経発揮』が古活字で印行されて以降，幾度となく翻刻され[10]広く流布したことがその一因として挙げられよう．しかしながら，このように『十四経発揮』が翻刻出版され活用されるようになった原因は何であろうか．

この点について小曽戸洋は次のように考察している[11]．

> 本書（筆者注：『十四経発揮』）は元代に刊行されたことは間違いないと思われるが，元刊本は伝わっていない．明代に入り，弘治年間（1488～1505）太医院医士の任にあった薛鎧（良武）の校訂を受け，息子の薛己（1487～1559）の手によって嘉靖7年（1528）盛応陽の序を付して刊行．後に薛鎧・薛己父子の編著をまとめた『薛氏医案』（二十四種本．十六種本には入っていない）に編入された．この薛氏本が現伝本の祖本となっている．中国では清代までは『薛氏医案』本のみで，単行されたものはない．朝鮮では全くかえりみられなかった．
>
> 一方，日本はというと薛氏父子の校訂本が出された嘉靖・万暦間の医学文献は，日本近世医学文化の黎明期における最先端の医学情報であったから，すこぶる歓迎され，中国よりもかえって日本の土壌に浸透してしまう結果を生んだ．すなわちこの『十四経発揮』は簡明であるとともに，薛氏の校刊ということも手伝って，日本で初めての古活字版医書となったのである．慶長元年（1596）12月，小瀬甫庵（道喜．さきに豊臣秀次の侍医をつとめた．『信長記』『太閤記』の作者としても知られる）の刊行した『十四経発揮』がこれである．以後これを皮切りに本書は何度となく翻刻を重ね，わが国における最大ベストセラー医書となった．

すなわち，日本で『十四経発揮』がかくも受け入れられた理由として，嘉靖・万暦間の医学文献は日本近世医学文化の黎明期すなわち安土桃山時代から江戸時代前期においては最先端の医学であった，『十四経発揮』が簡明であった，日本で広く受け入れられた薛氏の校刊を経て『薛氏医案』に編入された，これらのことを背景に日本で初めての古活字版医書として出版された，という．

古活字版医書の役割については，町泉寿郎は「古活字本は曲直瀬家など有力な医者が学塾で教える際のテキストとして印刷されたものではないか」との見解を示しており[12]，『十四経発揮』受容の先駆けとなった古活字本印行に曲直瀬家など有力な医者の関わりを示唆している．

これら先行研究により『十四経発揮』が日本に受容された概略は述べられていよう．しかし，経穴研究の拠るところとなるテキストが『十四経発揮』へと変遷していく過程についての具体的な様相については未だ十分に明らかにされていない．この経穴研究の依拠する中心テキストの変遷の具体的な様相を明らかにすることは，とりもなおさず，針灸分野における中国医学思想の受容の具体的様相を明らかにすることになると言えよう．これまで述べてきた通り，我が国における経穴の研究は17世紀前半を境にその依拠する中国典籍が大きく変遷していった．この時期に行われていた経穴研究の具体例について従来その詳細は明らかでなかった．本論では，安土桃山時代から江戸時代前期において中国医学思想がいかに日本に受容されたか，その具体的様相を経穴研究に焦点を当て論ずることを目的とするものである．

ところで，我が国における経穴および経穴部位の研究は江戸時代以降盛んに行われ，多くの経穴研究書が編まれた．例えば，堀元厚の『隧輸通攷』（1744年自序），菊池玄蔵の『経絡発明』（1753年刊），寺尾隆純の『十四経絡腧穴弁解』（1784年成），原南陽の『経穴彙解』（1807年序刊），小阪元祐の『経穴纂要』（1810年刊）等が挙げられよう．これらの先駆けとして著された経穴研究書として，秦宗巴（1550～1607）の『兪穴参伍的法』〔天正2年（1574）曲直瀬道三奥書〕と饗庭東庵の『黄帝秘伝経脈発揮』が知られる．前者は十四経脈の各経脈ごとに所属経穴の部位と主治についての簡明な記述を掲載し，またその病証ごとに主治穴をまとめて記した書であり，後者は『黄帝内経』の説に基づき経文を引用しつつ臓腑，経脈，経穴を論じ，それ以降の『甲乙経』『脈経』『千金方』『千金翼方』『銅人腧穴針灸図経』『太平聖恵方（巻99・巻100）』『針灸資生経』といった諸書を引いて経脈経穴などについて詳細に論述するもので，優れた江戸前期の経脈経穴学書として，つとに高い評価を得ている書である．いずれも，正にこの分野における嚆矢をなす，重要な経穴研究書であると考えられるのである．

このように先駆的経穴研究書を著した人物といえる，秦宗巴は曲直瀬道三（1507～1594）の門人であり，また饗庭東庵は曲直瀬玄朔の門人である．両者はともに曲直瀬家に従学していることから，上記の経穴研究の初期に曲直瀬家が少なからず関係していたことが推察される．また，これらの書の成立についても曲直瀬家が大いに影響を与えていたであろうことが推測されるのである．しかし，これらの書が編まれた背景，すなわち曲直瀬家とその周辺の人物が，いかようにこの研究にかかわり，その成果を蓄積し敷衍していったのか，といった当時の経穴研究の実態については未だ十分に明らかにされているとは言い難い．

以上のことから，曲直瀬門おもに曲直瀬道三の針灸観および経穴研究の実例を審らかにすることは，日本における経穴研究の依拠する中国典籍の変遷の具体例を明らかにすることになると考える．

ところで，当時の様相を残す資料としては，秦宗巴と曲直瀬道三の間で交わされた経穴についての問答を録した『黄帝明堂灸経不審少々』が現存する．従来その存在は報告されていた[13]が，内容に関わる検討は未だ報告されていなかったところを，先に些か究明した[14]．その結果，曲直瀬道三は諸書を参看し，また当時最新の経穴学を取り込み，あるいは師説や臨床的見地と照らして経穴部位の考定を行っており，その研究や門弟教育は『黄帝明堂灸経』『銅人腧穴針灸図経』を経て『十四経発揮』を中心に行うに至っていたこと，そしてまた，秦宗巴は経穴部位の諸説を比較検討し師・道三に質問を提示し，そこで得た回答をふまえ独自の見解を示して『兪穴参伍的法』を編著していたこと，従って『黄帝明堂灸経不審少々』は，江戸時代以降に活発に行われる経穴研究の萌芽とも言える安土桃山時代に行われた，経穴研究の実態の一端を残す良質な資料である，ということが明らかとなったのである．

ところでまた，国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』（WA7-115，無刊記，慶長古活字印本）（以下，国会蔵『明堂灸経』）には多くの書入れがなされている．『黄帝明堂灸経』は，勅撰の医方集『太平聖恵方』（992年刊）の巻100に収録された「明堂灸経」「小児明堂」を合わせ単行されたものである．その内の「明堂灸経」は尺寸法，灸法に関する記述であり，経穴部位と主治症の記述からなる．また「小児明堂」は小児の灸法に関する記述の集成である．これら両書は元・竇桂芳により『針灸四書』（1311年刊）に編入刊行され，日本では慶長古活字印本をはじめ版を重ね広く流布した書物である．

そこでこの書入れについて些かこれを調査してみると，上記の如き課題についてのささやかながらも確固たる究明がなされた．そこで以下に先ず，その書入れを抜出し，これに解析を加え，更にその意義についてまとめ，上記課題に対する意義についてまで言及してゆきたい．

2. 書入れの実際

この国会蔵『明堂灸経』に見える書入れはほぼ全巻にわたっており，多くは天頭および本文行間になされている．最終丁（55丁）裏には墨書で「取騎竹馬灸法」の12行が次の通り書入れられていた（返点・送仮名は原本による，〔　〕内は筆者による加筆，徐は『針灸大全』）．

騎竹馬灸法
従男左女右臂ノ腕中
横文起テ用テ二一条ヲ一量テ
至ル二中指ニ一斉テ二肉尽処ニ一不量
爪甲截断シテ次キ用イ二薄篦取
前同身可一寸則子
却令病人脱二去上下衣服ヲ一以大竹ノ扛（キヤウ）一条跨リ定テ
両人随徐扛起シテ
足要離コトレ地ヲ五寸許リ両傍更以両人扶ケ定テ毋レ
令レ揺コト不穏却以前〇（マメツ〔徐作「量」〕）
長篦貼定竹杠竪起従尼（〔ママ、徐作「尾」〕）骶骨貼レ脊ニ量テ
至テ二蔑（ホ）ノ尽処ニ一以
筆〇（マメツ〔徐作「点」〕）記此不二是灸穴一却テ用後取テ二同身ノ
寸ヲ一篦取両寸二摺自中穴
横量両傍各一寸方ニ是灸穴可灸三七壮此二穴専
ラ治〇〇〇〇〇〇（マメツ、〔右傍書〕癰疽悪瘡発）
レ背ニ癤□（疒＋毒）ヲ瘰癧諸□（疒＋風）灸之
極〔ママ、徐作「効」〕挟（ナリ）
（　　騎竹馬灸法
男は左，女は右，臂の腕中横文より起て，薄篦（稈心）一条を用て量て中指に至る，肉の尽くる処に斉しくして爪甲を量らず截断して，次ぎ，薄篦を用ひ，前の同身の一寸の則子とす可きを取り，却て病人をして上下の衣服を脱去せしむ．大竹の扛（キヤウ）一条を以て跨り定めて，両人随て徐ろに扛起して，足，地を離るること五寸許りを要す．両傍，更に両人を以て扶け定めて，揺ること穏やかならざらしむるなかれ．却て前に〇（マメツ）（量る）長篦を以て竹杠に貼け定めて，竪て起して，尼（ママ）（尾）骶骨より脊に貼り量りて蔑の尽く処に至りて，筆を以て〇（マメツ）（点記）す．此れは是れ灸穴にあらず．却て用ひて後，同身の寸篦を取りて両寸を取り，二つに摺んで，中穴より横に両傍各一寸を量る．方に是れ灸穴なり．三七壮を灸すべし．此の二穴，専ら〇〇〇〇〇〇（マ メ ツ）（癰疽，悪瘡）背に癤□（疒＋毒）を（発）す，瘰癧，諸□（疒＋風），を治す．これに灸すれば極めて挟（ママ）（効）あり．）

これは経絡には所属しない奇穴に分類される騎竹馬穴の部位と主治を記したものである．騎竹馬穴は『備急灸法』〔聞人耆年，宝慶2年（1226）成〕の淳祐5年（1245）重刊本に付されたのを初めに，諸書に記載されている[15]．

ところで，この国会蔵『明堂灸経』に書入れを行った者や，年月に関する記載は見られない．朱筆では書名・人名への朱引き，経穴の別名，所属経脈名などが，墨筆では訓点，語音，語釈，異本との校勘，経穴部位に関する記述などが書入れられている．書入れに見える書名・人名は『素問』（『黄帝内経素問』）・『素注』（『黄帝内経素問』注）・『難経』・『甲乙経（また甲乙）』・『千金』（『千金方』）・『銅人』（『銅人腧穴針灸図経』）・『聖済

（またセイザイ）』（『聖済総録』）・『明堂』（『黄帝明堂灸経』）・『十四経』（『十四経発揮』）・『徐氏（また徐）』（『針灸大全』）・『聚英（また聚）』（『針灸聚英』）・『会』（『古今韻会挙要』）・『集韻』・『金』（『金蘭循経』）・『針灸集書』・『集要[16]』，そして「師伝」・「師説」等が見られる．

ここで，「師伝」「師説」に着目し書入れを抽出すると，「師伝」「師説」を含む書入れは計7カ所に見られた．以下，書入れ位置（丁数表裏）：書入れ対象の本文「書入れ」としてこれらを列挙してみる．

① 17丁表：婦人懐孕…．若絶子，灸臍下二寸三寸間…．「師伝，二寸半」．
（婦人懐孕…．若し絶子せば，臍下の二寸三寸の間…に灸せよ．「師伝は二寸半なり」．）

② 18丁裏：或中二穴，在輸府下一寸…．「師説，一寸トアレトモ一寸六分ノ説ヲ用」．
（或中二穴，輸府下一寸…に在り．「師説，一寸とあれども一寸六分の説を用ふ，と」．）

③ 18丁裏：気衝二穴，在帰来下一寸…．「聚英，師説，二寸，聖済モ同二寸」．
（気衝二穴，帰来下一寸…に在り．「聚英，師説は二寸なり，聖済も同じく二寸なり」．）

④ 19丁表：三里二穴，在膝下三寸…．「師説，膝眼下三寸」．
（三里二穴，膝の下三寸…に在り．「師説は膝眼の下三寸なり」．）

⑤ 20丁表：天井二穴，在…肘後一寸…．「師伝云，肘［上一］寸」．
（天井二穴，…肘の後一寸…に在り．「師伝に云ふ，肘［上］の［一］寸，と」．）

⑥ 34丁裏：玉枕二穴，在絡却後七分半…．「一寸半，聚，明堂，銅人．師伝ニ，一寸三分」．
（玉枕二穴，絡却の後七分半…に在り．「一寸半，聚，明堂，銅人．師伝に一寸三分，と」．）

⑦ 44丁表：温溜二穴，在腕後五寸六寸間…．「五寸五分，師説」．
（温溜二穴，腕後五寸六寸間…に在り．「五寸五分，師説なり」．）

ここで①は「絶子（本書では「堕胎ト見ヘシ」と傍書あり）には臍下の二寸三寸の間，動脈中に三壮を灸せよ」という本文の「二寸三寸の間」に対する「師伝，二寸半」という書入れである．臍下2寸には石門穴，臍下3寸には関元穴があり，両穴とも絶子に関わる穴とされる（『甲乙経』『千金方』など）．しかしここの「師伝」では経穴名による解釈ではなく，「二寸半」という分寸をもって釈している．このような解釈は他書には見られない．「師」が「二寸三寸間」を「2寸から3寸の範囲内」としてではなく，「2寸と3寸の中間」すなわち「二寸半」と具体的に解釈し教示したという記述である．

②は或中（彧中）穴の部位について，本文の「輸府の下一寸，…」に対する「師説，一寸とあれども一寸六分の説を用ふ，と」という書入れである．彧中穴は現在では「前胸部，第1肋間，前正中線の外方2寸[17]」とされる．『甲乙経』以来，前胸部の経穴は多く縦1寸6分の間隔で部位表記され，彧中穴も歴代ほとんどの書で「兪府の下一寸六分，…」と記される．彧中を「兪府の下一寸」とするのは中国書では管見では本書『黄帝明堂灸経』しかない．「師説」は本書の「一寸」説には従わず「一寸六分ノ説ヲ用（ふ）」としており，多くの諸説に従うことを明示している．

③は気衝穴の部位について，本文の「帰来の下一寸，鼠蹊の上一寸，…」の「帰来の下一寸」に対する「聚英，師説は二寸なり，聖済も同じく二寸なり」という書入れである．気衝穴は現在では「鼡径部，恥骨結合上縁と同じ高さで，前正中線の外方2寸，大腿動脈拍動部[18]」とされる．歴代の諸書では「帰来の下，鼠蹊の上一寸，…」（『甲乙経』『千金翼方』『銅人腧穴針灸図経』など），「帰来の下一寸，鼠蹊の上一寸，…」（『千金方』『外台秘要方』など）と記されている．書入れでは「師説」とともに『針灸聚英』『聖済総録』において「帰来の下二寸」とするとしているが，現伝『針灸聚英[19]』『聖済総録[20]』では「帰来の下一寸」となっており，この書入れがいかなる底本によるかは不詳．また「帰来の下二寸」とするものは諸書には見えず，「師説」がいかなる典拠によるか

もまた不詳である．

④は足三里穴の部位について，本文の「膝の下三寸，…」に対する「師説，膝眼の下三寸」という書入れである．足三里穴は現在では「下腿前面，犢鼻と解渓を結ぶ線上，犢鼻の下方3寸[21]」とされる．『甲乙経』ほか歴代の多くの書では「膝の下三寸，…」とされており，「膝眼の下三寸，…」とするものは『銅人腧穴針灸図経（都数）』『扁鵲心書』『十四経発揮』などがある．「師説」では「膝眼の下三寸」とすることで，足三里穴の部位をより明確に示したと考えられる．

⑤は天井穴の部位について，本文の「天井二穴，…肘の後一寸」に対する「師伝に云ふ，肘［上］の［一］寸，と」という書入れである．天井穴は現在では「肘後面，肘頭の上方1寸，陥凹部[22]」とされている．「肘後一寸」とするものには『外台秘要方』などがある．「肘上一寸」とするものには『銅人腧穴針灸図経（巻上）』『針灸資生経』『神応経』『針灸聚英』『古今医統大全』『針灸大成』などがある．「肘の後一寸」の「後」は「うしろ（back）」という意ではなく，「すえ・はし（rear・end）」の意であると思われる．「師伝」で「肘の上一寸」と「上」を採用したのは，「後」という紛らわしい語を避けて取穴（経穴を取ること）の起点となる肘からの方向を明確化する意図があったと思われる．しかし，より詳細に分かりやすい取穴のための部位表記となると「肘のどの部分から上か」という点が明示されてはいない．

⑥は玉枕穴の部位について，「絡却の後七分半，…」に対する「一寸半，聚，明堂，銅人．師伝に一寸三分，と」との書入れである．玉枕穴は現在では「頭部，外後頭隆起上縁と同じ高さ，後正中線の外方1.3寸[23]」とされる．玉枕穴を絡却穴の「後七分」とするものは『甲乙経』『素問』王冰注，「後七分半」とするものは『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『医学綱目』など，「一寸五分（一寸半）」とするものは『銅人腧穴針灸図経』『聖済総録』『針灸資生経』『十四経発揮』『古今医統大全』『医学入門』などがある．一方で「師伝」は「一寸三分」との説をとっている．その依拠するところは不詳．

⑦は温溜穴の部位について，「腕の後五寸六寸間，…」に対する「五寸五分，師説」との書入れである．また天頭には「温溜，聚云，腕後小士五寸，大士六寸」と書入れがある．温溜穴は現在では「前腕後外側，陽渓と曲池を結ぶ線上，手関節背側横紋の上方5寸[24]」とされる．温溜穴の部位について，腕の後「小士五寸，大士六寸」とするものは『甲乙経』『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『医学綱目』，「大士五寸，小士六寸」とするものが『銅人腧穴針灸図経（巻中・下）』『聖済総録』『十四経発揮』『針灸聚英』『古今医統大全』『針灸大成』，「五寸」とするものには『針灸大全』『医学入門』などがある．一方，『黄帝明堂灸経』では体格の大小に関わらず「五寸六寸間」と記述している．これは一見，具体性を欠いた記述にも見えるが，「間」字を「範囲内」として捉え，「五寸から六寸の範囲内」で経穴反応を現している場所を温溜として取穴する，と考えると臨床的に含意をもった記述といえる．「師説」では①と同様に「間」字を「中間」として解釈し「五寸と六寸の中間」すなわち「五寸五分」としている．経穴部位を言語・文字をもって明確に表すことに重きをおいた表現であると考えられる．

3. 書入れについての解析

そこで，これらの内容について考究すれば，①②④⑦は，曲直瀬道三と秦宗巴との師弟問答書簡を録した『黄帝明堂灸経不審少々』（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵，杏5185）（以下『不審少々』）中の，道三による宗巴への返答に見える文言である．『不審少々』にはそれぞれについて，①「雖云，二寸半ノ義也」，②「雖云，一寸六分是」，④「三里，在膝眼下三寸」，⑦「五寸半也」と記されている．③⑤⑥は『不審少々』では言及されていない経穴である．これらの書入れも「師」の説・口伝と云う点では共通しており，よって『不審少々』と無関係とは考えがたい．すると『不審少々』には残されていない道三の経穴に対する考え方を残す資料として意義がある書入れといえる．

以上要するに，国会蔵『明堂灸経』書入れにある「師」は曲直瀬道三を指すと考えられる．

また，書入れのうち3カ所は『不審少々』に同文または類文が見られた．これらの書入れは，すなわち（〔　〕内は筆者による加筆），

ⓐ10丁表－天頭：「天突．明堂ニハ三寸．聖済，聚英，素注，四寸．甲乙，千金，五寸．」
（天突．明堂には三寸．聖済，聚英，素注は四寸．甲乙，千金は五寸．）

ⓑ10丁裏－天頭：「曲池下．徐氏，銅人，二〔三の誤か〕寸．聚英，聖済，千金，二寸．」
（曲池の下．徐氏，銅人は二〔三の誤か〕寸．聚英，聖済，千金は二寸．）

ⓒ44丁裏－天頭：庫房「天突ノ傍各四寸而一寸六分也．」
（天突の傍ら各おの四寸にして一寸六分なり．）

である．

この書入れⓐⓑⓒの『不審少々』にみられる同文または類文は，すなわち（〔　〕内は筆者による加筆），

ⓐ『不審少々』1丁表：「天突一穴，在項（ママ）結喉下五分中央，云々〔明堂灸経〕．聚英，素問注，聖済総録等ニハ結喉下四寸，云々．甲乙経，千金方等ニハ結喉下五寸，云々．又，明堂ノ奥ノ小児之灸部ニハ結喉下三寸，云々．」
（「天突一穴は項結喉の下五分中央に在り，云々〔『明堂灸経』〕」と．『聚英』，『素問』の注，『聖済総録』等には「結喉の下四寸，云々」と．『甲乙経』『千金方』等には「結喉の下五寸，云々」と．又た，『明堂』の奥の「小児之灸部」には「結喉の下三寸，云々」と．）

ⓑ『不審少々』1丁表：「手ノ三里，在曲池下二寸，云々〔明堂灸経〕．銅人，徐氏灸経ニハ三寸ト云．聚英，千金方，聖済等ニハ二寸ト云．」
（「手の三里は曲池の下二寸に在り，云々」と．『銅人』『徐氏灸経』には「三寸」と云ふ．『聚英』『千金方』『聖済』等には「二寸」と云ふ．）

ⓒ『不審少々』1丁裏：「天突ノ下一寸，璇璣」「璇璣〔外〕二寸腧府」「腧府〔外〕二寸気戸」「〔車房，〕雖云，〔気戸下〕一寸六分是．」
（天突の下一寸，璇璣なり．）（璇璣の〔外〕二寸，腧府なり．）（腧府の〔外〕二寸，気戸なり．）（〔車房，〕雖が云ふ，〔気戸の下〕一寸六分，是なり．）

である．これは経穴の部位について諸書を校勘して部位を考定していった過程を残した曲直瀬道三と秦宗巴の師弟問答の一部である．このことより本書の書入れは道三門あるいは宗巴門の経穴研究と少なからぬ関係があると思われる．ここから，本書の書入れは両門に関わる者がなし，本論で検討した以外の書入れも両門の経穴研究と関わる可能性が考えられるのである．それは，経穴研究の初期ともいえる当時の経穴研究の実態を残している書入れと考えられ，我が国の経穴研究史を考究する上では貴重な意義を持つといえる．

4. おわりに

我が国の経穴研究は江戸時代以降，多くの経穴書が編まれ活発に行われた．道三，宗巴の両者が，その先駆けとも言える安土桃山時代に諸書を参看し経穴研究を行っていたことは『不審少々』や宗巴著『兪穴参伍的法』などからも知れる．しかし，その実態は未だ詳細には明らかになっていない．ところが，この国会蔵『明堂灸経』は両者に関わると思われる書入れがなされており，この書入れによりこの時代における経穴研究の実態が，些かなりとも明らかになるものであると考えられる．

すなわち，当時の経穴研究における経穴部位考定の過程を次のように窺い知ることができる．それは，経穴の部位について多数の書を用いて諸説を校合比較し，師弟間で意見を交わし，あるいは多説を取り，あるいは具体的部位を明示するため文言を改め，その上で経穴部位の説を提示するというものである．国会蔵『明堂灸経』の書入れは，このように当時の経穴研究の具体例を残している点において重大な意義を持つといえる．

本論の要旨は第115回日本医史学会学術大会にて発表した[25].

本研究を進めるにあたり，ご指導を賜りました日本大学文理学部の舘野正美教授，北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部の小曽戸洋部長，大浦宏勝客員研究員に深く感謝いたします.

注および参考文献

1）教科書執筆小委員会．新版 経絡経穴概論．東京：医道の日本社；2011．p. 7

2）中国では，1027年に『銅人腧穴針灸図経』が勅命により従来混乱のあった経脈・経穴の諸説を考定し経脈経穴の標準テキストとして刊行された．その後，王執中『針灸資生経』（1220年刊），張介賓『類経図翼』などで経穴部位の諸説の比較が行われている．日本では，饗庭東庵『黄帝秘伝経脈発揮』（17世紀中頃刊），山本玄通『針灸枢要』（1676年刊），堀元厚『隧輸通攷』（1744年自序），安井元越『腧穴折衷』（1764年自序），多紀元簡『挨穴集説』（18世紀成），原南陽『経穴彙解』（1807年序刊），小阪元祐『経穴纂要』（1810年刊）など多くの書で経穴部位の諸説について論究されている．近年では，2008年にWHO/WPROが合議決定した経穴部位について『WHO Standard Acupuncture Point Locations in the Western Pacific Region（WHO/WPRO標準経穴部位）』（World Health Organization, 2008）が発刊されている．

3）『皇国名医伝』（浅田宗伯，1852・71年刊）によると，開祖の吉田意休（生没年未詳）はもと出雲大社の神官で，永禄年間（1558～70）に渡明，7年間留まり，針術を崔林杏（琢周）に受けたという．『刺針家鑑集』（1661年刊）などが伝存．

4）『皇国名医伝』によると，入江流の開祖・入江頼明は，はじめ豊臣秀吉の医官・園田道保に針術を学び，のち，朝鮮出兵時に捕虜となった明人の呉林達に針術を授かり，京都にて入江流を興したという．なお，江戸期以降，現代に至るまで針灸界に大きな影響を及ぼしている杉山流の開祖であり，本邦独自の管を用いて針を打ち入れる管針術を広めた杉山和一は，頼明の孫・豊明に師事し大きな影響を受けている．

5）大浦宏勝．江戸前期における鍼灸諸流派間の穴名変遷過程の考察．杏雨2014；17: 27–87

6）『扁鵲新流針書』の慶長12年（1607）識語によれば，奥州の越斎寿閑が得た妙針を村井四郎右衛門に伝えて興った流派という．

7）『針要集』序などによると，桑名将監は長宗我部元親の家臣として文禄の役（1592年）に従軍，捕虜として連行された朝鮮の針医・金得拝から針術を学んだことにより興った流派という．金得拝は明の雲海士に学んだとされる．『針法蔵心巻』（1611年写）『広狭神倶集』（1612年写），『理穴集』（1612年写）などが伝存．

8）匹地流は，『大明琢周針法一軸』の序および跋によると，慶長年間（1596～1615）に長崎に渡来していた明人の琢周に，出雲の匹地喜庵が針術を受けてなされた流派という．『大明琢周針法一軸』（福田道折，1679年刊），『大明琢周針法鈔』（福田道折，刊年未詳）などが伝存．

9）前掲注5参照．

10）小曽戸洋によると，『十四経発揮』は印刷年次が明らかなもので次の21回刊行されている（書名未記載は『十四経発揮』）．慶長元年（1596），慶長9年（1604），元和4年（1618），寛永2年（1625），寛永8年（1631），慶安2年（1649）『（新刻）十四経絡発揮』，万治3年（1660），寛文5年（1665）『（新刊）十四経発揮』，延宝3年（1675），貞享元年（1684），元禄8年（1695），宝永6年（1709），享保元年（1716），享保16年（1731），宝暦12年（1762），明和元年（1764），寛政8年（1796），寛政10年（1798），享和元年（1801），文化2年（1805）『（假名読）十四経発揮』，天保10年（1839）『十四経穴分寸歌』．小曽戸洋．和刻漢籍医書出版年表．日本漢方典籍辞典．東京：大修館書店；1999．p. 417–437

11）小曽戸洋．漢方古典文献概説（32）元代の医薬書（その4）．現代東洋医学1991；12(2): 99

12）町泉寿郎．『十四経発揮』をめぐる諸問題　日本における受容を中心に．経絡治療2008；174: 41–57

13）長野仁．曲直瀬家医学書覚え書　その1．鍼灸OSAKA 1999；15(3): 92．長野仁．書物からみた日本鍼灸の歴史―内藤記念くすり博物館の鍼灸書―．鍼のひびき灸のぬくもり―癒しの歴史―．岐阜：内藤記念くすり博物館；2002．p. 44

14）拙稿．『黄帝明堂灸経不審少々』考―安土桃山時代の経穴研究の一例として―．東洋医学雑誌．（2015年掲載予定）

15）この書入れの騎竹馬灸法は『針灸大全』や『針灸聚英』の文言に近いが異なる．その依拠するところの詳細は不明．

16）『集要』の書名が見える書入れは「用火法」篇の3丁表に「集要云，天陰則以槐木取火」とある．現伝の『針灸集要』に「論灸火」の篇はあるが同文はない．ほぼ同文の「天陰以槐木取火」の語が『針灸集書』点艾火（内閣文庫所蔵，308函275号）などに見える．

17）WHO西太平洋地域事務局原著．第二次日本経穴委員会監訳．WHO/WPRO標準経穴部位―日本語公式版―．神奈川：医道の日本社；2009．p. 148

18）前掲書（注17）．p. 60

19）高武．針灸聚英，針灸節要合刻本．国立公文書館内閣文庫所蔵．臨床鍼灸古典全書49．大阪：オリエ

ント出版社；1993
20）徽宗勅撰．聖済総録．文化13年（1816）江戸医学館翻刻本・拠大徳4年（1300）刊本．国会図書館デジタルコレクション
21）前掲書（注17）．p. 63
22）前掲書（注17）．p. 162
23）前掲書（注17）．p. 104
24）前掲書（注17）．p. 37
25）天野陽介，舘野正美，小曽戸洋，花輪壽彦．国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』の書入れについて．第115回日本医史学会学術大会．九州国立博物館（福岡）．日本医史学雑誌 2014；60(2)．p. 202

On the Notes of the *Xinkan Huangdimingtangjiujing* (新刊黄帝明堂灸経) in the Possession of the National Diet Library

Yosuke AMANO

Nihon University, Graduate School of Literature and Social Sciences

This paper analyzes the notes of *Xinkan huangdimingtangjiujing* which are in the possession of the National Diet Library, particularly referring to those notes which include “master said”, or “master’s theory”. Some of those are found in the answers from Manase Dosan (曲直瀬道三) to Hata Soha (秦宗巴) collected in the *Kotei meido kyukyo hushin shosho* (黄帝明堂灸経不審少々) which is the record of the question and answer letters between Manase Dosan and Hata Soha. This research indicates that this volume has a close relation to the acupuncture research of Dosan’s or Soha’s school. And it indicates that the “master” in the Notes of *Xinkan huangdimingtangjiujing* refers to Dosan.

Acupuncture research has been flourishing since the Edo era and has compiled a lot of volumes on acupuncture. This volume contains some pioneering pieces of this research done in the Azuchi Momoyama era by Dosan and Soha, and is a precious material, showing that some of the state of affairs of the research done in that age still remains today.

Key words: *Xinkan huangdimingtangjiujing*, Manase Dosan, Hata Soha, *Kotei meido kyukyo hushin shosho*, acupuncture research